

高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川1225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740 (32) 4156

近江聖人と北京の聖者

「藤樹先生と清水安三先生」

松本 孝太郎



国子女に教育された教育方針が受け継がれていることに感銘を受けました。

二〇〇九年(平成二十一年)、孔子学院の世界大会が北京で開催された。その機会に陳経林中学を桜美林大学北京事務所の関さん(通訳)と二人で訪ねた。この学校の前身は戦前、安三先生が大変なご苦労で建てられた崇貞女学校だからである。校門を入ると安三先生の銅像が私たちを迎えて下さいました。この銅像の建設については、反日運動が激しかった時で種々の議論のすえ建設が決まったとのこと。玄関を入りエレベーターで最上階の校長室に案内された。校長室の壁面には清水安三先生ご夫妻の写真や、安三先生が中国の貧しい子女の為に非常なご苦労をされて建てられた当時の崇貞女学校の写真などが展示され、また先生の著書も書棚にありました。私は校長室の雰囲気から、今も安三先生が中



陳経林中学の校門の前で



清水安三先生の銅像の前で

ことに感銘を受け、安三先生の偉大な教育理想を感じました。
安三先生の著書『石ころの生涯』で崇貞学園はいろいろな理想を持っているが、その一つは藤樹書院のような学園にしたいことだ、と述べています。

昭和二十年、清水先生が非常な苦労をされ貧しい中国人・韓国人子女のために建設された崇貞学園は、終戦と同時に北京政府に接収され先生方は即刻退去を命じられました。その後学校は北京第四女子中学・朝陽中学・陳経林中学となりましたが、校長室で感じたように今も崇貞学園時代の教育理想が引き継がれている

安三先生と藤樹先生の出会いは先生の著書『史的中江藤樹』の中で、「明治三十年九月二十五日の藤樹先生二百五十年祭に当時六歳の先生が村長だった叔父と列席したのがきっかけです。」とあります。その後、先生は「私ぐらい藤樹さんを崇拜し、藤樹さんを真似んとして生涯を生きたものはなかるう。先年新聞や



校長室の掲示板写真の前で

雑誌に『北京の聖者』と称せられたことがある。私は自ら自分が聖者では絶対的にあらざることを知っていたが、藤樹が生前に近江聖人と呼ばれていたことを思い出して、仮にも誤つてでも『北京の聖者』と呼ばれたので、實を言うとは何とも言うに言われぬ感を抱いたのであった。」と書かれています。

安三先生は、藤樹を崇拜するのみでなく、藤樹を研究することがとつても好きであると述べておられるが、それは先生の何冊も出された中江藤樹の研究書を読むとよくわかります。